

日本体育学会共催シンポジウム スポーツ科学の成果と競技力向上 I

関矢 寛史 (広島大学)

去る平成 11 年 10 月 7～11 日に、東大駒場キャンパスで日本体育学会第 50 回記念大会／体育・スポーツ関連学会連合大会が開催された。その中でもメインとなる企画として、28 の異なるテーマのそれぞれについて、複数の学会や研究会が共同でシンポジウムを開いた。我が日本テニス学会からは、『マスターズスポーツ』のシンポジウムに弘前大学の小山先生が、また『スポーツ科学の成果と競技力向上 I』のシンポジウムに亜細亜大学の堀内先生が、それぞれシンポジストとして参加された。私は後者のシンポジウムの司会を勤めたが、今回はそのシンポジウムの報告をしたいと思う。

まず、このシンポジウムの主旨を紹介したい。現在、日本には日本テニス学会のように、スポーツ科学の成果を現場での競技力向上に役立たせることを目的として活動している学会や研究会が多数存在する。これらの研究組織は、競技スポーツにおける研究と現場との「ギャップ」を埋め、現場で役立つ研究を目指しているが、スポーツにおける競技力向上を目指す場合、必然的にそのスポーツの多様な側面をとらえた総合的なアプローチが求められる。それはまた、競技スポーツにおける現場のコーチが選手の競技力を向上させるために、多様なスポーツ科学の知識を必要とすることと同じである。

そのため本シンポジウムにおいては、特定のスポーツ種目、もしくはスポーツ種目群を対象に学際的アプローチを行っている 3 つの研究組織からシンポジストを招き、各研究組織の活動がそれらのスポーツの競技力向上にどのように貢献しているかについて、その現状と問題点を討論した。本シンポジウムに話題を提供した研究組織とシンポジストは、下記のとおりである。

- 日本テニス学会 (堀内昌一先生、亜細亜大学)
- 日本水泳・水中運動学会 (若吉浩二先生、奈良教育大学)
- 日本冬季スポーツ科学研究会 (結城匡啓先生、信州大学)

シンポジウム当日には、選手、指導者、研究者を含めて 400 名を超える

人達の参加があり、大講義室に収まりきれず立ち見の参加者も多かった。日本テニス学会からも多くの方々が参加されたようであった。シンポジウムにおいては、最初に各シンポジストに以下に挙げたような質問を投げかけ、これらの質問に対する回答を含めた形で各シンポジストが発表を行い、最後にフロアーを含めてのディスカッションを行った。

質問 1. 各学会・研究会において、スポーツ科学を現場で役立たせるために、どのような活動が行われているか？

質問 2. スポーツ科学が競技力向上に実際に役立った例として、どのようなものがあるか？

質問 3. スポーツ科学の成果を競技力向上につなげることは簡単ではないと思われるが、これからクリアすべき問題点としてどのようなものがあるか？

質問 4. 上記「3」で挙げられた問題点に対する解決策としてどのようなものがあるか？

シンポジストの 3 名からは、上記の質問への回答の他にも各研究組織で行っている様々な活動や問題点についての発表が行われたが、ここでは詳細は省いて、私にとって印象に残ったポイントのみを紹介したいと思う。

まず、日本水泳・水中運動学会と日本冬季スポーツ科学研究会においては、日本のトップアスリートに対する科学的サポートが非常に積極的に行われ、選手や指導者にも肯定的に受け入れられているということが強烈な印象として残った。日本水泳・水中運動学会では、日本水泳連盟医・科学委員会との共同活動として、国内や国際大会での水中ビデオを用いたレース分析やストローク分析、または水球のゲーム分析など、データを選手や指導者に直ちにフィードバックできる体制を作っている。また、日本冬季スポーツ科学研究会では、長野オリンピックにおいて IOC 医事委員会のバイオメカニクス研究プロジェクトとして“スラップスケート”の使用の是非に関して、動作分析やレーススピードの分析や血中乳酸濃度の分析などによる情報を選手に提供した。これら日本のトップアスリートを対象にした科学的サポートは、日本テニス学会も今後目指していくべきことの一つであろうと感じた。そのためには、日本テニス協会や日本プロテニス協会との関わりが重要になると思われる。

また、日本テニス学会の堀内先生からは、体力トレーニングとメンタルトレーニングは、テニスプレイヤーの競技力向上に貢献してきたが、技術トレーニングと戦術トレーニングにおいては、その効果があまりみられないという発表があり、後者の研究をしている私などには刺激材料となる発

表であった。水泳やスキーなどに比べて、テニスはオープンスキルの要素が強く、バイオメカニクスの分析やゲーム分析などの研究には困難がつきものであるが、それだけに今後期待される科学的サポートの分野であると言える。

また、3名のシンポジストから共通して挙げられた点は、用具の開発や科学的サポートによる競技力向上に対する倫理的および教育的意義についてであった。科学的サポートによって、競技力が向上することにどのような意味があるのかという、一見このシンポジウムのタイトルに相對すると受け取られがちな討論であるが、科学的サポートを行っていく組織のメンバーとして、避けては通れない論点であると感じた。やはり堀内先生の発表にあったように、選手が科学に「依存」してしまわないように、そして選手自身の学習能力を高めることが、我々が目指すべき科学的サポートであると感じた。最後に、このシンポジウムの企画・運営を実際に行われた安田女子大学の友末先生と慶応義塾大学の村松先生に感謝の意を表したい。

(せきや ひろし)

